

## 現代における自己実現の過程に関する一考察

小林 恵\*

(平成5年4月30日受理)

### 要 旨

自己実現は教育の目的のひとつである。しかしながら農耕民族であった歴史、神と我という関係を持たない宗教上の理由、偏差値重視の社会や学校の価値観などで自己実現は難しい状況に陥っている。自己実現とは生まれもった自然的自己を社会の枠組みの中で実現させることである。言い換えればアイデンティティの結実といってよい。この作用に教育の持つ役割がある。教育によって人は自己実現の仕方を学んでいく。それは一生の基盤になるものである。

### KEY WORDS

self-actualization 自己実現

children 子ども

identity アイデンティティ

### はじめに

教育の目的には文化の伝達とか、社会生活の準備や、個性の確立、などさまざまな側面が存在する。自己実現も、教育の目的のうちに存在している大きな問題の一つといってよい。教育に関する諸論文でその終わりを「目指すところは子ども一人一人の自己実現である」と締めくくられたものを見ることは希ではない。

しかしながら我々は自己実現という概念をはっきりと捉えているであろうか。多くの場合曖昧なままで一つのスローガンとしてだけ唱えてはいないだろうか。

本論文においては、この曖昧な概念である自己実現の問題をいま一度的確に捉えなおすことを第一の目的とする。次にその自己実現の過程を阻むものは何かに焦点をあててみる。その上で自己実現を育む指導過程とカリキュラムの問題を検討していきたい。

### 1 自己実現とは何か

そもそも自己実現とは何であろうか。教育学事典には次のように記されている。

自己実現とは、有機体の完全なる発達であり、可能性の実現ということである。すなわち、基本的欲求がすでに満たされ、成長を遂げ、完熟の域に達している状態を意味するのである。

---

\* 教育方法講座

それは、達成感・安定感・自信・自尊心と誇り・信念・生活の喜びが互いに交錯し、実に多彩で特有の人格状態をあらわす。客観的にいえば、自我の高揚と高い心的緊張感からくる力の充実感、人格機能の十全なはたらきを示し、人間性の法則が完全に生かされている状態を示すのである。<sup>(1)</sup>

またデュフロによれば「緊張し、はじめたことを完成するまで固執し、失敗してもやり直し、疲労や退屈や落胆と闘い、あらゆる束縛に耐え、冷静と忍耐を保ち、平凡な仕事の時には余力を貯え、抵抗と決断と創意とに満ち、強力な行動が必要なときに敏速に行動し得る性質」<sup>(2)</sup>と述べられている。

あるいは自己実現をあらゆる可能性を現実化するものとして捉える場合もある。この広い意味での自己実現という概念は実存哲学、臨床心理学、精神分析等の諸領域においても見いだされる。

この時自己実現は文字どおり「自己の実現」として捉えられ、自己の自己形成として観察される。ミンコスキーは「現実との生ける接触」と言い、ロジャーズ (Rogers, C. R.) は「経験に開かれている人格」と呼んでいる。

こうした自己実現を達成するためにマズロー (Maslow, A. H.) は欲求が低次なものから高次なものへと満たされていくことが前提であるとした。

これは欲求階層説といわれ、まず(1)食欲、睡眠欲などの生理的欲求、(2)外界の危険から身を守る安全欲求、(3)所属と愛情の欲求、(4)人間として、あるいは個人として尊重される尊重の欲求、(5)自己実現の欲求がある。<sup>(3)</sup>

これらの欲求は低次なものが満たされてから初めて高次なものへと欲求が進んでいくのである。言い換えると低次の欲求が満たされない限り、高次の欲求は出てこないことを意味している。低次欲求ほど強力で優先性を持つのである。即ち、(4)までの欲求が満たされて初めて(5)自己実現の欲求が出てくる。

これは上田吉一にいわせると「すでに自己肯定を遂げた人が、そのエネルギーを外に結晶させて生産し、創造し、愛情を与え、あるいは自己の個性を生かして潜在的に持つものと実現しようとする欲求のことである。なお、知識欲求、美的欲求など、真・善・美・正義・完全性・健康といった高次の価値を求める欲求もこの欲求のうちに含められる」<sup>(4)</sup>のである。

(1)から(4)の欲求が達成されて初めて自己実現の欲求が出てくるという理論に立てば基本的に人間の欲求は肯定され、受容され満足されなければならないことを意味する。人間一人一人に対する絶対的な信頼があってこそのものである。

しかしながらはたして人間の欲求が正しいものであるかという疑問が提示されよう。この疑問についていえばラットのカフェテリア実験が答えを与えてくれる。

ラットのカフェテリア実験というのはさまざまな種類の餌をカフェテリア式に並べ、鼠に自由に選択させて食べさせてみるというものである。鼠は好きなものを自由に食べるわけで、一見偏食に陥って健康や成長を阻害していくと考えられる。しかしながら実験の結果は意外にも鼠はトータルバランスのとれた餌をとり健康を害することもなく、人間が与えた餌を食べて飼育された鼠よりも順調な成長を遂げるのである。

ここで我々は自然な欲求が、人間の手によるものよりも正しく好ましいものであることを知るのである。<sup>(5)</sup>

鼠と人間とは違うという疑問も提示されよう。この疑問にはルソー (Rousseau, J. J.) の思想を願みたい。ルソーによれば人は生まれたときには神の手にあるが、ひとたび人間の手に渡ると悪になる。それゆえに消極教育が望ましいとした。まさに「自然に帰れ」である。我々は人間本来が持っている欲求にもっと信頼をおくべきなのである。

しかしながら現実の状況はどうであろうか。ここで自己実現とは何かという問いをいったんおいて自己実現を阻んでいるものは何かについて考察してみたい。

## 2 自己実現を阻むものは何か

教育現場において自己実現の問題はどのようにとらえられて指導されているであろうか。

文部省が昭和40年(1965)以降次々と発行している『生徒指導の手引』の中には自己実現の問題が積極的に提起されている。

例えば以下のようなものである。第1章生徒指導の意義と課題、第1節生徒指導の意義において「将来のいろいろな社会生活や集団生活の中で自己を実現しながらも、よりよい集団や社会を形成していく資質や能力・態度にもなるものである」<sup>(6)</sup>と述べられ、続いて「よくいわれる自己実現も、社会の成員としての自覚に基づく、社会の一員としての自己実現であることはいうまでもない」<sup>(7)</sup>としている。

また、第2節生徒指導の課題に至っては「生徒の学校生活への適応や自己実現に関する問題が増大し、その解決についての援助や指導が必要とされている」<sup>(8)</sup>と一項目を設け「社会生活は、ますます複雑さを増しており、学校を卒業した者が、社会生活に適応し、自己実現を図っていくためには、困難さが増大している。このような時代の趨勢から、学校教育は、生徒指導によって、生徒の将来における適応や自己実現に役立つ資質を育成する必要に迫られている」<sup>(9)</sup>と論及している。

さらに、第2章生徒指導の原理、第1節生徒指導の基礎としての人間観においては「生徒指導は、人間の尊厳という考え方にに基づき、一人一人の生徒を常に目的自身として扱うことを基本とする。これは、内在的な価値を持った個々の生徒の自己実現を助ける過程であり、人間性の最上の発達を目的とするものである。」<sup>(10)</sup>と自己実現を前面にだしてこの章を始めている。

このように『生徒指導の手引』においては自己実現が重要なキーワードになっている。

また「その社会において共通に認められている価値に一致する行動には、子どもの自発性に基づくものの全くないではないが、一般的にはその大部分は、模倣や同一化に基づいていて、親やその他のおとなの行動様式を取り入れることによって、こどもの身についてくるものであり、それは、いわば社会化の結果である。幼児期や児童期における基礎的な社会化のうえにそれがしだいに明確になるとともに、その発展が行われていき、こどもはやがて自覚的な存在として社会的価値に対して自ら視野を広げ、主要な価値の選択において自主的な判断を下すことができるようになるが、社会的存在であるかぎりその個人の自己実現は、常に社会的価値との関連において行われるものとしての社会的自己実現という形をとらざるをえない。」<sup>(11)</sup>として、自己実現の過程が社会的存在として人間形成の過程と表裏するできごとであることを指摘している。

このような自己実現が実際の子どもの世界においては難しいものとなっているのは、今日の

社会的状況に起因するところが大きい。自己実現がともすれば学校教育から乖離しがちとなるのは学校や我々一人一人にだけ責任が帰されるものではない。日本の精神風土が自己実現を生み出しにくい、育むことが難しい条件を抱えているといえる。その原因はいくつか挙げられようが、ここでは三つの点を指摘したい。

まず第一には日本の伝統的な生活風土が集団作業を必要とする農耕民族のそれであったという点である。個人個人がどれだけうまく作業できるかより集団としての能力が問われてきたのである。このことによりどうしても個人とか個性という現実より集団という社会的視点が重要視されてしまうのである。もはや日本人の大部分は農耕的集団としては生活していないのだがこの思想だけは脈々と生き続けているのである。否、日本人は今日もはや農耕的生活集団でなくなったとはいえ、それはほんの第二次世界大戦後のことである。千年単位で続いてきた農耕生活の慣習 (custom) の歴史は依然として日本人の生活慣習 (habit) となって歴然としてある。農耕的な生活集団でなくなってからわずかにまだ半世紀もたっていないのである。我々が個人の個性的な能力という概念に弱い理由の一つがここにある。

今一つは宗教上の理由が挙げられる。個人主義が発達している欧米はキリスト教文化のもとにある地域である。「神と我」という一対一の関係が生活文化の基本になっている。この関係から個人を自覚せざるを得ない。また個人は神が造ったたった一人の人間という意識も強い。他の誰でもない「我」である。神が造った「我」を大切にしないで何を大切にするというのか。ここに欧米の個人主義の前提がある。そして「我」が大切なように他者も個人として尊重される。個人個人が独立した社会なのである。

このような歴史的、文化的事情を背景とする近代西欧の科学技術文明との交流と創造の過程のうちに現代日本における教育の問題がある。それは知識重視、偏差値一辺倒、学歴社会等の諸問題となって見いだされる。

子ども一人一人の自己実現は軽視され、知識の詰め込みが行われている。その結果七、五、三といわれるように小学生で三割、中学生では五割、高校生に至っては七割の生徒がその場で習熟するべきものが習熟されていない。落ちこぼれ、落ちこぼしといわれる問題である。

また子どもの生の姿でみないで偏差値という単なる数値でラベリングしてしまう風潮も、もはや根づき、あたりまえのものとなっている。

この偏差値主義は高等教育機関に順位を容易に付けしめ、日本がかつてから直面している学歴社会の問題を一層根深いものにしていく。

我々はややもすれば子どもの知識の量、偏差値の数字、所属している（または将来所属していくであろう）学歴だけを子どもの自己実現と見なしてしまう恐れさえある。

要するに現代教育の状況下においては子どもの自己実現を図るための教育は大きな困難に直面していることがわかる。我々はいかにしてこれを克服する道をきりひらいていくことが可能なのであろうか。

### 3 自己実現の過程

ここで再び自己実現とは何かという命題に戻ってみる。

まず「自己」(self)について考察してみたい。

さまざまな研究者が「self」について述べている。ミード (Mead, G. H.) は自己概念 (self-concept), サリヴァン (Sullivan, H. S.) は自己組織 (self-system) を, シルダー (Scilder, P.), フェダーン (Federn, P.) らは自己体験 (self-experiences) について検討を試みている。

これらにおいて研究されている self の問題は identity の問題と重複している。

アイデンティティとはラテン語の *identitas* に由来し、「まったく同じものである」「その人に相違なく本人である」「そのもの自分自身」「正体」等の意味がある。

アイデンティティを重要な概念として捉えたエリクソン (Erikson, E. H.) は「各個人が青年期の終わりに成年としての役割を身につける準備を整えるために、成人になる以前の全ての経験から獲得していかなければならない一定の総括的な成果」<sup>(12)</sup>と述べている。

「自己」について話を戻すところである。「自己」とは着物を一枚一枚脱ぎさった後に出てくる裸の自分であり、動くことのない極めて内省的なものである。これは「自然的自己」と呼ぶことができる。

これに対してフロイト (Freud, S.) は生涯に一度だけ inner identity という言葉でアイデンティティについて語っているのだが、それは自分とユダヤ人との結び付きを明確にしようとした時であった。即ち、心理、社会的な含蓄をともなって用いたのである。「自然的自己」に対応して「社会的自己」と呼びたいと考える。この「社会的自己」は「自然的自己」を離れて存在するものではなく、また「自然的自己」と「社会的自己」は全く背反するものでもない。

「自然的自己」と「社会的自己」との関係は後述するとして、ここでまず考察したいのは「自己」のあるところには必ず「他者」があることである。

「他者」とは「自己」を見るものである。我々は「自己」を考えるとき「他者」との関係を考察することなしに行うことはできない。レイン (Laing, R. D.) は「個人を考察する場合にも、各個人は、常に、他者に働きかけかつ働きかけられているものだということを忘れるわけには行かない」<sup>(13)</sup>と述べている。「自己」は彼の〈世界〉における唯一の主体ではないのである。

あらゆる人間関係は他者による自己の、自己による他者の定義づけを含んでいる。このような補完性は人生のそれぞれの時期において中心的にも周辺的にもなりうるし、力動的な意味合いの大きいことも小さいこともありうるのである。<sup>(14)</sup>

子どもにとっての「他者」は草や木であり、山や川であり、星や月であり、学校であり、両親であり、教師であり、友達であり……と子どもの「自己」を取り巻く全ての環境と言い換えてもよい。

人間は周囲や人々に対する感動や理解と尊敬、あるいは期待や支持や信頼といった態度を受け止めることによって始めて自己に対する自信と自尊感情を獲得し向上意欲を持つことができる、即ち自己実現が達成されるのである。<sup>(15)</sup>

ここで「自然的自己」と「社会的自己」の関係について考察してみたい。

人間は社会的動物である。一人で生きていくことはできない。社会の枠組みの中で存在していくものである。他者の集合の中での自己の存在を確立していくことが必要である。内なる極めて内省的な自然的自己が社会の枠組みの中で定義される自己、即ち社会的自己にまで昇華されていくとき自己実現が達成されるといってよい。この過程において教育が重要な役割を果たす。

ここで気を付けなくてはならないことが三つ挙げられる。

ひとつは、人間は社会的動物であるけれど、主体的な形成の過程においては、社会があって自己があるのではない。自己があってこそその社会である。ここの認識をはっきりとしていかななくてはならない。この点において先に出した文部省の『生徒指導の手引』にはいささかの言い足らぬところが感じられる。

伊東博も次のように批判している。

まず価値の多様性を認めていない。あるいは人間の主体性とか、価値を創造するといった側面を見ていないで、ただ精神分析でいう「取り入れ」(intorojection)だとか、「社会化」(socialization)といった非主体的な過程のみを強調している。

また「社会的自己実現」ということばについて自己実現は常に社会に向かうものだからわざわざ「社会的」ということを言い出すのはどのようなものかとも指摘している。<sup>(16)</sup>

これは前述したように社会と個人の相互補足的関係が曖昧であったり、社会が個人を規定する面のみを強調してしまったりした結果ではないだろうか。そうであってはならない。自己実現はそれがどんな社会的なものであっても個人の自己実現があってこそのものである。

全米教育協会は『人間中心の教育課程』の中で、「国家にとって善なるものは個人にとっても善であるといったやりかたを棄てて、我々は『建国の父たち』の精神—個人にとっても善なるものは国家にとっても善である—toちかえらなければならない。教育的営みの機能は社会の欲求に応ずることだけであってはならない。それは、自己を実現したいという個人の欲求にも応じなければならない」<sup>(17)</sup>と述べている。

ここのところをはっきりとしていないと自己実現が単なる社会での役割分担に過ぎないものになってしまう、人間が意志を持たない歯車でしかなくなってしまう。

いまひとつはレインが偽—自己と呼ぶ問題である。

我々は子どもに対してさまざまな期待を持つ。子どもがうまくそれを消化して自己実現の中に取り入れればよいのだが、期待が高すぎたり、介入の部分が多すぎたりしてそうでない場合もある。子どもの自然的自己を全く顧みないことすらある。

その場合子どもが他者の思惑に惑わされず真の自己を確立して自己実現に向かうのではなく、偽の自己を作り上げてあたかもそれが真の自己であるかのように振舞ったりしてしまうことがある。

自己は他者があってこそと述べたが、それは他者に踏み込まれたものとは違う。自己の存在確認がまず第一義なのである。

我々は多くの場面で子どもに介入するが、子どもが真の自己を失ったり、偽の自己を生きていくことがないように格段の注意をすることが肝要である。

三つめは我々が現代の社会をどのように捉えているかということである。近代における工業化社会において西欧の諸集団がプロテスタンティズムを核として自己実現を図ってきたことはウェーバー (Weber, M.) が言うとおりである。それが近代の資本主義社会を作り完成させてきた。

しかしながらもはや現代日本の社会は工業化社会を経て高度情報化社会になっている。情報化社会における自己実現は工業化社会におけるそれよりもずっと複雑である。その上地球環境的観点にも立たなくてはならない。地球環境の観点に立たなくては我々は次の世代に現代の地球を残すことができない事態に追い込まれている。この地球社会の根本問題の把握を我々はもう一度確認して子どもの自己実現を手助けしてやらなくてはならないのである。

#### 4 自己実現の指導とカリキュラム

これまで考察したように自己実現とは自然的自己が社会的自己（伊東がいうように自己実現は常に社会につながるものだから社会的自己というのは正確には的確な言い方ではない。しかしながらここでは自然的自己に対応する言葉として取えて社会的という言葉を使うこととする）にまで昇華してアイデンティティの結実となることである。この過程に教育の持つ使命がある。

子どもに自己実現という概念はまだ早すぎるという意見も出されよう。とりわけ今日のようなモラトリアム時代にあってはアイデンティティの確立が成年期の遅くまでかかることを子どもも社会も容認している。

いやモラトリアム時代ということを考慮にいれなくても自己実現とは人間が一生かけて行うことであろう。学校教育だけでなく、職業に従事したときに、また結婚という過程をとおして、あるいは主婦となって家庭を維持していくときなど人生のさまざまな場面を通して人は自己実現を図ろうとする。

しかしながら子どもの時期における自己実現の試みはそうした一生をかける自己実現のスタートであることに重要な意味を持つ。子どもにはその子どもなりの自己表現の過程がある。ここで自己実現を体感しその感覚を正常な状況で身につけていないと将来にわたって自己実現がとざされていく恐れがある。子ども時代の自己実現の経験がより高い次元での自己実現となっていくのである。

ここでエリクソンは子ども時代の初めからずっとまるで自分が何物であるかがおよそわかってしまったように感じたり、そう思い込んだりするような仮の結晶化 (crystallization) が起こることに注意しなくてはならないとしている。<sup>(18)</sup>子どもの可能性は無限だという言葉はいささか責任のない言葉であるが、可能性の窓は大きく開かれていることを子どもも我々も認知していなくてはならないのである。

学校教育における子どもの自己実現の第一歩は子どもの自然的自己を確認していくことである。

自然的自己はさまざまな視点により見いだされる。

まず、教師の印象によるものがある。「おとなしい子」「社交的な子」「めんどうみのよい子」など、教師は一人一人の子どもについて印象を持つ。教師は多くの子どもの中において一人一人の印象を持つのだから、教師が印象としたものはその子どもの中の明確な自然的自己であるといえよう。また教師の目は社会の目のひとつであるから、社会においてもその子どもの自己として意識される可能性が高い。それは逆にいえば子どもの社会における自己実現を示唆している。

次に、教師が情報によって知る子どもの自然的自己がある。親をはじめとする第三者からの情報によって子どもの意外な一面を知ることは希ではない。学校では粗野な子どもが家庭においては優しいしっかり者の子どもだったりする。また消極的という印象の子どもが地域社会で活躍していたりもする。教師は学校以外の場においての子どもを知る努力も怠ってはならないのである。繰り返すことになるが、自然的自己と社会的自己は相互補足的であり、主体的自己形成（自己実現）の過程の両側面として見いだされる。

さらに子ども自身によって語られる自己がある。前述したように自己を知ることは一生をか

けた仕事である。しかしそれだからこそ子ども時代に語られる「我とは何か」とは深い意義を持つのではないだろうか。「我とは何か」を知るスタートである。

子どもによって語られる自己は言葉をとおしてだけではない。花の絵を描かせても夢に溢れる絵を描く子どももいれば細部にまで観察の行き届いた絵を描く子どももいる。それぞれが自己の現れなのである。鉛筆とノートの学習だけでない子どもの作業、遊戯をとおして自己が語られていることに教師は注意を払わなければならない。

このように教師はさまざまな側面からの子どもの自然的自己を観察していかなくてはならない。そしてそれが断片的な寄せ集めに過ぎることなくトータルなものとして捉えていかなくてはならないのである。一人の知覚し経験する人間全体を理解しようとする。それには単なる因果関係の説明ではなく、意味関連の了解こそ重要であるといったのはドイツの歴史家ディルタイ (Dilthey, W.) であった。彼は了解とは汝のうちに私を再発見することだと述べている。<sup>(19)</sup>

教育において第二に大切なのは子どもに全幅の信頼を寄せることである。あるがままに受け入れることがなくして自然的自己をトータルなものとして捉えることはできない。

エリクソンは人生の中で発展させるべき精神的健康の第一の構成要素を sense of basic trust (基本的な信頼の感覚) としているのである。<sup>(20)</sup>ここで trust とよばれているのはベネディク (Benedek, T.) が自信 (confidence) と呼んだものと一致する。<sup>(21)</sup>

ここで重要なことは子どもがいつも希望を持って生きるということである。学校という世界における必要な自分の知識や技術に失望して、自分は凡庸に生まれついているからだめだ、とか学校という枠の内側の生活だけで社会的に不適格な人間と自らを位置づけてしまわせないことである。

それから先述した偽一自己の問題もここで今一度注意を促したい問題である。学校という枠の中で扱いやすいだけの人間を育てていくことはないか、管理しやすい人間をよしとしていないかを教師はいつも振り返ってみなくてはならないのである。その上で人間の中核となるべき本質的なものが教育の対象となっているかどうかを考えなくてはならない。

第三のステップとしてはマズローのいう自己実現的人間に子どもがなれるような場を与えなくてはならないということである。マズローは次の十三を自己実現的人間としている。

- ・現実をそのありのままによりよく知覚する。
- ・自己自身、他人、自然をよりよく受容する。
- ・自発性が高まる。
- ・問題によく精神集中することができる。
- ・人間のいざござから超越して、孤独を保ちたいという欲求が増大する。
- ・自律性、自主性が高まり、時代の変化に巻き込まれることに抵抗する。
- ・物事をいつも新鮮に味わい、情緒的反応が豊かになる。
- ・至高経験 (peak experience) または至福経験、自己超越感を持つことが多くなる。
- ・人類の一員としての一体感、同一感が増大する。
- ・対人関係のもち方が変化する。
- ・性格構造がより民主的になる。
- ・創造性が非常に高くなる。
- ・価値観に確かな変化が起こる。過程を楽しむようになる。<sup>(22)</sup>

以上のような経験の場をひらくには教育の過程に多様な体験や刺激を用意して子ども一人一



人がそれを選択できるようにすることが求められる。ここでカリキュラムは教育のもつこの要請に答えたものでなくてはならない。カリキュラムが単なる知識の伝達に留まってはいけない理由がここにある。

全米教育協会は1970年にこの点を留意したカリキュラムを提唱した。それは「カリキュラムⅠ」「カリキュラムⅡ」「カリキュラムⅢ」と呼ばれるものである。

このカリキュラムの中で「カリキュラムⅢ」がとりわけここで扱っているテーマに着眼している。カリキュラムⅢは全米教育協会によれば、自己の覚醒と自己の発達を主眼とし、人間であることの主として個人的な局面を扱うものだ、と論及している。<sup>(23)</sup>その上でカリキュラムⅢの目標として「すべての児童生徒がひとりの人間としての自己自身を発見し、自己尊重の正当な根拠を展開させ『私はどんな人間なのか』という、だれでもいつでももっている疑問について満足できる解答を見つけていく」<sup>(24)</sup>としている。まさにアイデンティティの模索を援助し自己実現を目指すカリキュラムである。

しかしながら現代の日本においては学習指導要領でカリキュラムの大綱が決められ全米教育協会のいうカリキュラムⅢのようなカリキュラムの実現は不可能だという懸念も示されよう。

だがカリキュラムは学習指導要領に基づく基準カリキュラムと、一時間一時間を構成する実践カリキュラムとで編成されていると考えることができる。言い換えると教える内容と分量には拘束面が強く見いだされるが、この内容を教え方を中心に捉えなおしていくと学校や教師の自由裁量に任されている領域が広く深く見いだされてくるといってよい。確かに現実には知識の伝達に重きがおかれていることは否定できない。しかし、知識の伝達の過程においても自己実現の教育は可能ではないだろうか。

例えば日本の歴史を学ぶことで遙かな過去へ興味をもち始める可能性がある。また、たった一編の詩を国語の時間に書き教師から誉められた記憶が一生の支えとさえなりうる。どちらも自己実現の過程をひらく重要な一步である。

あるいは算数は得意だが体育は不得意という子どもがいたとする。子どもにとって体育の時間は苦痛以外の何物でもないはずである。しかしながらここで教師がその子どもを点数係にすると子どもは得意な分野を生かすことができるし、苦痛から解放される。級友からも支持される。まさに小さくとも確実な自己実現の過程の一步なのである。

このように教師は子ども一人一人について細やかに手を差し伸べてやらなくてはならないのである。

知識の伝達はそれはそれで重要なものであるし、平板に単なる伝達に留まらせることなく生き生きとしたものになるよう教師は心がけていかななくてはならない。

こうした過程の中で子どもは集団の中での未来に向かっての有効な歩みを学ぶ途上にあるという自覚を生む。それは、自己が特定の社会的現実の枠組みの中で生きる自己へと発達しつつあるという確信を深める過程をひらく。

しかしながらそれは容易なことではない。自分もつ潜在力を開花させようとするれば現実との葛藤がたびたび経験されることになる。しかしこの葛藤は防衛的というよりも創造的であるし、何か新しいものを生み出す努力において克服されるはずである。<sup>(25)</sup>

ここに教師の指導力の役割が見いだされる。子どもが自己実現に向けて葛藤している時、教師はその葛藤が創造的なものであるように方向付けてやらなくてはならない。それは子ども自身に働きかける場合もあるであろうし、子どもの周囲の環境を整えてやることもあろう。

教師は学習やさまざまな活動を通して子どもの個性が発揮できる社会的機会を調整して経験の一貫性と独自性を守ってやるように心がけなくてはならない。それは子ども一人一人に一貫性のある自己の意識と社会への位置づけを保証する。すなわち自分は本当に自分であるという意識、全てが安定しているという感じ、他人が善意に満ちているときに自分をこういう人間だと考えてくれる、そのような人間に自分が近づきつつあるという意識を与えてくれるのである。

このような点に注意していけば一連の最も個人的な経験系列の中で、健康な子どもは適切な指導さえ与えられるなら発達の内的法則にしたがうという点で信頼できるのである。<sup>(26)</sup>

いまひとつ重要なことは教師自身も常に自己実現していこうという意識が必要である。子どもには子どもの自己実現があるように教師にも教師の自己実現がなくてはならない。単なる知識の伝達者や子どもの管理者になってはいないか常に自己を顧みることが必要である。教師自身がよりよい教師として自己を実現していこうとしない限り、子どもも変わっていこうとはしないのである。

## おわりに

現代は自己を見失わないやすい時代である。我々は自己を失って顔のないマスの中へと埋没しがちである。それは生き生きとした個性的な世界とその形成の過程を失わせるのみならず、危険な大衆化社会を生み出す。すなわちファシズムの時代である。我々はそんな危険と隣合わせに住んでいることを常に認識しなくてはならない。であればこそ自己実現の大切さも一層はっきり理解できよう。

## 引用文献

- 1) 細谷俊夫, 奥田真丈, 河野重男編『教育学大事典3』第一法規 1978 p.128.
- 2) フィロックス, J.C. 著 村上仁訳『精神力とは何か』白水社 1952 p.8.
- 3) 上田吉一著『自己実現の教育』黎明書房 1977 pp.30-31.
- 4) 同上書 p.31.
- 5) 同上書 pp.23-24.
- 6) 文部省『生徒指導の手引 改訂版』1981 p.3.
- 7) 同上書 同頁
- 8) 同上書 p.8.
- 9) 同上書 同頁
- 10) 同上書 p.11.
- 11) 同上書 同頁
- 12) エリクソン, E. H. 著 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 1981 p.131.
- 13) レイン, R. D. 著 志貴春彦, 笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房 1984 p.93.
- 14) 同上書 p.99.
- 15) 前掲書『自己実現の教育』 p.25.

- 16) 伊東博著『自己実現の教育』明治図書 1984 pp. 71-72.
- 17) 全米教育協会著 伊東博訳『人間中心の教育課程』明治図書 1976 p. 11.
- 18) 前掲書『自我同一性』 p. 149.
- 19) 岡堂哲雄編『現代における自己実現 展望と具体化』至文堂 1978 p. 10.
- 20) 前掲書『自我同一性』 p. 57.
- 21) 同上書 p. 67.
- 22) 前掲書『自己実現の教育』 pp. 83-84.
- 23) 前掲書『人間中心の教育課程』 pp. 106-108.
- 24) 前掲書『自己実現の教育』 p. 106.
- 25) エリクソン, E. H. 著 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 1992 p. 12.
- 26) 前掲書『自我同一性』 p. 55.

## A Study of the Process of Self-actualization in Our Time

Megumi KOBAYASHI\*

### ABSTRACT

The self-actualization is one of the aims of education. But it is difficult for children to attain self-actualization, firstly because of Japan's history as an agricultural race, secondly because of the religious background where there is no personal relationship between God and man, and thirdly because of the deviation within society and the way of evaluation in schools. The self-actualization means the definition of one's self within the framework of society. In other words it is the fruition of one's identity. In this process there is the role of education. People learn how to attain self-actualization through education. The self-actualization is the basis of entire life.

---

\* Division of Method and Evaluation